

類集文字抄箋証

要 旨

高 橋 忠 彦
 (中国古典学)
 高 橋 久 子
 (日本語学)

『類集文字抄』は、室町時代の意味分類体辞書、和名集類に属するが、テキストに問題が多いため、十分に研究が進んではいない。本稿は、標出語の漢字表記及び仮名表記に問題がある例をとらえ、その誤記や通用が生じた理由について考察した。結論として、そのような現象が生じた理由を類型化することができた。これは、古辞書のテキスト研究に於いて、広く参考とすることができる。

キーワード：漢語、漢字表記、傍訓、誤記、古辞書

一 はじめに

『類集文字抄』は室町時代の古辞書であるが、語の表記には問題が多く、それ故に却って、古辞書に関する、誤写・誤読などの諸問題について、リアルな資料を提供するものと思われる。

『類集文字抄』の伝本には、静嘉堂文庫蔵本・東京大学蔵弘化三年黒川春村写本・刈谷市立図書館蔵本等有る。一般に利用できる翻字本文としては、続群書類従三〇輯下に、文明十八年に乙夜又丸が書写した本の翻字が収められている。今回検討の対象とする静嘉堂文庫蔵『類集文字抄』（函架番号五〇一―七）は、温故堂文庫の旧蔵にかかり、卷下一冊のみ存する零本である。巻首に「類集文字抄下巻」の内題、巻尾に「類集文字抄下終」の尾題及び「乙夜又丸／文明十八歳八月二日書畢」の識語を有する。墨付き三十二丁（うち、目録半

葉余）、毎半葉八行書写。総語数約二五一〇。室町期の意味分類体辞書、いわゆる和名集類に属する。墨付き三十二丁、毎半葉八行書写。

『類集文字抄』は『快言抄』・『天理本和名集』の二書と近縁関係にあり、既に散佚した共通祖本から分派して、前者と後二者とに分かれた間接的關係にあると考えられている。『類集文字抄』の特徴としては、以下の点が認められる。

- ① 「降物并風部付聳」を持つこと。
 - ② 「死類姦行囚獄部」を持つこと。
 - ③ 「文筆硯紙部」を持つこと。
 - ④ 「嫁娶燈焼部」を持つこと。
- ①の「降物（ふりもの）」「聳物（そびきもの）」は連歌の専門用語であり、室町期に流行した連歌に詠み込まれる気象現象関連の語彙と表記を載録した部である。②は穢れに属する語彙を纏めた部であり、葬礼と刑罰とを関連付けて

いる点に特色がある。③には公的文書の種類が列挙されており、他に類を見ない。④の前半には、婚姻関連の語彙が纏められており、辞書におけるこのような発想は稀である。

本稿は、『類集文字抄』に見られる表記上の特徴を特に取り上げ、古辞書に於ける誤記等の諸問題を考察する手がかりを得ようとしたものである。

二 類集文字抄箋証

〔凡例〕

- 一、静嘉堂文庫蔵『類集文字抄』を底本とし、標出語の漢字表記および傍訓に問題がある場合、その理由について簡単に記した。
- 一、特に議論の必要がある事例については、考証を行った。
- 一、日本では字形類似による漢字の通用が定着している場合がある。そのようなものは、誤りとしてでなく、通用として説明した。
- 一、漢字は常用漢字に改め、それ以外のものは康熙字典体を用いたが、必要に応じて、原本の特殊な異体字を使用した場合がある。
- 一、標出語の位置は、「2才39」のように示した。これは、二丁表の三行目、上から九番目にあることを示す。

2才39 日精 同(ヒトルタマ)

「日精」は「火精」の誤り。菊の異名の「日精」との混同によるか。和名抄に引く兼名苑に「火珠、一名陽璣、火精也」とあることから、日本では陽璣すなわち、火を生ずる宝玉を水精ならぬ火精と呼んだことがわかる。ただし、狩谷椽斎の論ずる如く、中国では「火精」に、普通そのような意味はない。火気の精髓としての太陽、火星、鳳凰などの意に用いられる。とはいえ、文選の雪賦李善注に引く詩緯含神霧に「天不足西北、無有陰陽、故有龍銜火精、以照天門中也」とあるものや、太平御覽卷808に引く統漢書に「哀牢夷出火精、琉璃」とあるものは、詳細は不明ながら火を放つ宝玉の類であろう。ことに後者は火珠すなわち陽璣と同一とも考えられる。

2才44 璐琚

「璐琚」は「璐瑋」の誤り。字形類似による。

2才83 嗟 アラタ 畚 同 菑 同

「嗟」は荒田の意、「畚」「菑」は新田の意であり、本来別語であるが、ここでは同訓異字の扱いを受けているかに見える。まず「嗟」(正体は「嗟」)についていえば、説文解字に「嗟、残(殞の誤)田也、詩曰天方薦嗟、从田差声」とあり、段玉裁は「嗟、殞菑田也(菑字依集韻、類篇、韻会所挾補、殞而且蕪之田也、是曰嗟)」と解し、また別に「崎」について「崎、殞田也(殞各本作残、今正、残者、賊也、殞者、禽獸所食余也、因之凡余謂之殞、今則残行而殞廢矣、残田者、余田不整齐者也)」と解している。要するに、未整備で荒廢した田畑のことであり、荒れた田という意味で、「あらた」なる和訓と対応する。それに対し、「畚」と「菑」は、爾雅釈地に「田、一歳曰菑、二歳曰新田、三歳曰畚」と記し、いずれも開墾してまもない良田のことをいう。他に「畚」を開墾後一年の田であるとか、二年目の田であるとする説もあるが、爾雅の説を主流と見てよいし、いずれにせよ新田の称である。したがって、新たな田という意味で、「嗟」と「菑」の和訓「あらた」も妥当である。しかしながら、「嗟」と「畚」「菑」を同訓異字のように記すことは誤りである。観智院本類聚名義抄には「畚(音余 田二歳) 畚(正) コナタツクリ」、「畚(音細) アラタ アラタハル ウネ 田一歳) 菑菑(稲三或)」、「嗟(音嗟 残菑田) 嗟(正)」とあり、「嗟」の和訓は載せない。二卷本世俗字類抄に「菑(アラキハリ) 俗作荒田) 畚(同)とあるのに対し、二卷本色葉字類抄では「嗟(アラタ) 菑(田一歳也) 畚(已上同 田三歳) 畚(アラキハリ) 菑(已上同)」と、「嗟」を加えて「アラタ」と読んでいる。類聚文字抄は、このような流れをうけるものであろう。黒川本色葉字類抄にも、「嗟(サ 荒田也) 菑(同 田一歳曰) アラキハリ) 畚(同 音余 田二歳也) 畚(アラキハリ) 菑(同) 載(同)」とある。

2才86 速田 コエタ

「速」という漢字は中国には存在しない。「こえた」の訓から推せば、「腴」と表記すべきものであり、「速」は「腴」の異体字として作られたものと考えられる。ただ、「速」は独自に作られたというよりは、「速迫」という熟語の存在を前提としている。扁揃えにより「腴迫」が「速迫」に変化したため、

「速」という漢字が存在するようになったのであろう。ただし、土地が肥えているか痩せているかという意味の「腴迫」という熟語自体、中国には存在しない。日本では、庭訓往来、三月往状に「且東作業事、兼相水旱之年、須計速迫之地、被致所務」と、「速迫」の語を使用している。ここで「迫」は、文脈から、また同所に「佃御正作之勸農、除迫地、撰熟田、急令下行種子肥料」として、「迫地」と「熟田」を対比していることから、痩せた土地の意であることがわかる。中国には、三国志、蜀書、諸葛亮伝の「成都有桑八百株、薄田十五頃」のように、痩せた土地を意味する「薄田」という語があるが、「迫」は「薄」に通用させたものであろう。なお、庭訓往来の「速迫」について、謙堂文庫蔵伝経覚筆本は、右訓が「ユウハク」、左訓が「コヘヤス」であり、内閣文庫蔵室町期写本は、右訓が「ユイハク」、左訓が「コヘタルヤセル」、謙堂文庫蔵庭訓往来註（旧註）は、「速ハ肥也、迫ハ乾也」とする。なお、岩波書店刊、新日本古典文学大系『庭訓往来 句双紙』の影印本文は「速迫」であるが、翻字本文は「迪迫」に誤っている。庭訓往来の語は古辞書に影響を与えたため、運歩色葉集にも「速迫（ユハク 速者孰（熟）、迫者乾）」とある。

2ウ23 埤 同（クロ）

「埤」は「埤」の誤り。

2ウ28 隴 クロ

「隴」は「隴」の誤り。「隴」は「壟」に同じ。

2ウ38 疇 スク

「疇」は「疇」の誤り。

2ウ42 鑿 同（クワ）

「鑿」は「鑿」と通用する。

2ウ43 柅 クワノエ

「クワノエ」は「ワクノエ」（わくのえ）の誤り。

2ウ45 柅 同（スキ）

「柅」は「柅」の誤り。

2ウ46 耦 同（スキ）

「耦」は「耦」の誤り。

2ウ48 杵 フスキ

「フスキ」は「コスキ」（こすき）の誤り。

2ウ410 馬杷 マクワ

「馬杷」は「馬杷」の誤り。

2ウ61 五穀

「五穀」は「五穀」と通用する。

2ウ73 穀 同（コメ）

「穀」は「穀」と通用する。

2ウ74 糲 シラケヨネ

「シラケヨネ」（しらげよね）は「ヒラシラケノヨネ」（ひらしらげのよね）の誤り。

2ウ78 糙米 同（モチノコメ）

「モチノコメ」は「モミヨネ」（もみよね）の誤り。

2ウ79 糲 同（モチノコメ）

「糲」は「糲」の誤り。

2ウ88 種 同（ワセ）

「種」は「ラクテ」（おくて）が普通。

2ウ810 稔 同（ワセ）

「稔」は「稔」の誤り。

3オ12 稔 同（ラクテ）

「稔」は「ワセ」（わせ）が普通。

3オ15 杭米 ウルシネ

「杭」は「杭」と通用する。

3オ16 糲 クロシネ

「クロシネ」は「クマシネ」（くましね）の誤り。

3オ18 糲 同（ヒツチ）

「糲」は「糲」の誤り。

3オ25 稂 イナモト

「イナモト」は「イナクサ」（いなくさ）の誤り。

3オ31 糧糲 カフシ

- 「カフシ」(かうぢ)は「ホシイ」、「ほしいひ」の誤り。
 3オ38 菟 同(ヒエ)
 「ヒエ」は「ヒユ」(ひゆ)の誤り。
 3オ44 蕎麦 ソハムキ
 「蕎」は「蕎」と通用する。
 3オ45 蓋(蕎) 同(ソハムキ)
 「蓋」は「蕎」の誤り。
 3オ53 香柔 イヌエ
 「柔」と「菜」は通用する。
 3オ63 稍 ムキカラ
 「稍」は「稍」の誤り。
 3オ71 藪 同(ナエ)
 「ナエ」(なへ)は「ナキ」(なぎ)の誤り。
 3オ73 稼 ニウ
 「ニウ」は「ニキワウ」(にぎはふ)の誤り。
 3ウ24 朴 同(スワウ)
 「スワウ」は「ホフノキ」(ほほのき)の誤り。
 3ウ32 牛桜 マハサクラ
 「牛桜」は「朱桜」の誤り。「マハサクラ」は「ニハサクラ」(にはざくら)の誤り。
 3ウ61 陵苕 マヤナキ
 「マヤナキ」は「マカヤキ」(まかやき)の誤り。
 3ウ62 菌芋 マツ、シ
 「菌芋」は「菌芋」の誤り。「マツ、シ」は「ニツ、シ」(につつじ)の誤り。
 3ウ64 女貞 ヒメツ、シ
 「ヒメツ、シ」(ひめつつじ)は「ヒメツハキ」(ひめつばき)の誤り。
 3ウ72 株 同(カイトノキ)
 「カイトノキ」は「クイセ」(くひぜ)の誤り。
 3ウ77 檢 ヒサキ
 「檢」は「檢」の誤り。
- 3ウ710 枡 同(ヒサキ)
 「枡」と「枡」は通用する。
 3ウ83 様 トチノキ
 「様」は「椽」の誤り。
 3ウ87 枚 同(トチノキ)
 「枚」は「枳」の誤り。
 4オ15 櫃 カシ 櫃 同
 「櫃」には「かし」の訓は当たらず、「櫃」が崩れた字形が「櫃」に似ているため、「櫃」と書いたであろう。その結果、両方が掲出されたもの。日本では、「櫃」と「櫃」を混同する類例は多い。「櫃」の崩し方を、万葉集の卷一の二九番歌についてみると、類聚古集では「櫃」の右傍の一本目を「厶」のように、また二・三本目の「一」を「厶」の如く書き、全体として「魯」に近く見える。このようなところに、「櫃」を「櫃」と書く原因があるものと思われる。他の辞書にも類例は多く、観智院本類聚名義抄に「櫃」(音魯ヤクラ コシキ カシ 露也 旅也 大掛也)、国立国会図書館蔵拾篇目集に「櫃」(カシ ヤクラ)、成善堂文庫蔵用心集に「櫃」(カシノキ) 櫃(同)、初心要抄に「櫃」(カシノキ) 櫃(同)、宣賢卿字書に「櫃」(カシノキ) 櫃(同)、温故知新書に「櫃」(カシ) (但し、右傍下部に余分に「一」若しくは「厶」が見える)とある。
 4オ16 枳 同(カシ)
 「枳」は「枳」の誤り。
 4オ110 枳 同(カチ)
 「枳」は「枳」の誤り。
 4オ23 櫛 トチ 櫛 同
 「トチ」は「クスノキ」(くすのき)の誤り。
 4オ25 櫛子 カフチ
 「カフチ」(かぶち)は「カヘノミ」(かへのみ)の誤り。
 4オ27 櫛 同(カフチ)
 「カフチ」(かぶち)は「カヘ」(かへ)の誤り。
 4オ31 枳桐 シユロノキ

「栴桐」は「栴欄」の誤り。

4才37 杜合樹 同(ヒイラキ)

「杜合樹」は「杜谷樹」の誤り。

4才45 食菜莢 ホフタラ

「食菜莢」は「食菜莢」の誤り。「ホフタラ」は「ヲフタラ」(おほたら)の誤り。

4才47 杼 同(タラノキ)

「杼」は通常「とち・くぬぎ」であり、「たらのき」に当たる字義はない。「杼」は、「たらのき」の訓を持つ「柞」の書き崩しであろう。慶長十五年版倭玉篇には、「桜(サイ タラノキ)」、また「柞(サク タラノキ ハウソ)」とある。しかしながら「柞」は本来「くぬぎ」の意であって「たらのき」の意味はない。「杼」に「たらのき」の訓が付与された理由は、「柞械」(くぬぎとたら)なる熟語があることからの類推により、「柞」と「械」が同義と誤解されたことによると思われる。日本ではこのような現象は多い。そもそも「柞械」という語は、詩経、大雅、綿に「柞械拔矣、行道兌矣」(鄭箋は「柞、櫟也、械、白桜也」と述べる)、劉歆の甘泉宮賦に「予章雜木、榿松柞械」とあるので、日本でも通用していたのであろう。この「械」には、本草和名「桜子(音如佳反)、一名械、一名白桜(小木也、出崔禹)、和名多良」とあるように、「たら」の訓が付せられ、上述のように、これが「柞」の訓にも及ぼされたものである。

4才52 梶 ムクノキ

「梶」は「榿」の誤り。敦煌俗字典360頁に「甚」の異体字として、下部を「止」に作る例を挙げる。

4才56 木天蓼 マタ、ヒ

「木天蓼」は「木天蓼」の誤り。

4才65 衛子 イヌマユミ

「衛子」は「衛矛」の誤り。

4才71 白糖 クミ

「白糖」は「白糖」の誤り。

4才73 烏草樹 同(アセミノキ)

「アセミノキ」は「サシフノキ」(さしぶのき)の誤り。

4才74 鉤樟 クヌキ

「鉤」は「釣」と通用する。

4才75 攀樹 同(クヌキ)

「攀樹」は「攀樹」の誤り。

4才76 山菜 コフシ

「山菜」は「山菜莢」の誤り。「コフシ」(こぶし)は「コフシハシカミ」(こぶしはじかみ)の誤り。

4才85 栴(エノキ)

「栴」は、「栴」の誤記もしくは異体である。和名抄に「爾雅注云、榿一名栴(上音古雅反、字亦作檜、下音瑠、和名衣)」とあり、これは爾雅積木の「栴、山榿」の古注によるものである。ここから、「榿」と「栴」は、ともに「え」の和訓を持っており、この「えのき」の訓にも対応する。しかし「栴」が直接に「栴」に変化することは考えにくく、中間に「栴」が介在したことが想定される。まず、観智院本類聚名義抄に「栴(音陷 エノキ)」とあるように、「栴」が「栴」の異体として成立し、これが前田本色葉字類抄に「榿(カエノキ 古雅反 又作檜同) (栴) 同 音伯」とある「栴」に変化したと推測される。ここで付されている発音「陷(カン)」も「ハク」も、字形から推測したものに過ぎず、従うことはできない。なお、「栴」が「栴」に変化したのは、「臼」と「旧」を同様に書く現象によるものであろう(『敦煌漢文写卷俗字及其現象』311頁参照)。

4才810 榿 同(カシワ)

「榿」は「榿」と通用する。

4ウ19 杜 同(ユツリハ)

「杜」は「杜」と通用する。

4ウ24 梓杞 アツサエ

「梓」は、「あづさ」、「杞」は、「あふち」若しくは「かはやなぎ」の訓を持ち、ともに樹木の名であるが、木材として使用されるため、古くから連用された。国語、楚語上の「晋卿不若楚、其大夫則賢、其大夫皆卿才也、若杞梓皮革焉」(韋昭注に「杞梓、良材也」とある)が古い例で、人材の比喻として常用さ

れる。「梓杞」の例は少ないが、全晋文巻146に載せる「晋平西將軍周処碑」には「琳琅梓杞、珪璧棟梁」とある。ここで無関係な「アツサエ」(あじさい)の古形、あづさゐ)の訓を付しているのは「あづさ」との類似による誤りであろう。

4ウ25 栂 サクナキ

「サクナキ」(さくなぎ)は「サクキ」(さくぎ)の誤り。

4ウ37 栲 同(ヌルテ)

「栲」は「栲」の誤り。

4ウ38 銀杏 イキヤウ

「イキヤウ」は「イチヤウ」(いちやう)の誤り。

4ウ43 榧 同(クワ)

「クワ」は「クワノミ」(くはのみ)の誤り。

4ウ44 枇 同(クワ)

「枇」は「柘」の誤り。

4ウ45 榎 ヒチノキ

「ヒチノキ」は「ネスモチノキ」(ねずもちのき)の誤り。

4ウ47 椰 同(モミ)

「モミ」は「ナキ」(なぎ)の誤り。

4ウ410 寄 ヤトリキ・ホヤ

「寄」は「寄生」の誤り。

4ウ411 粟 キノフシ

「粟」は「稗」と通用する。「キノフシ」は「フシツケ」(ふしづけ)の誤り。

4ウ66 楮 ネソ

「ネソ」は「ネフ」(ねぶ)の誤り。

4ウ610 楸 同(クイ)

「楸」は「楸」の誤り。

4ウ74 李 カラモ、

「李」は「杏」の誤り。

4ウ75 類 カフ

「類」は「頭」の誤り。

5オ23 答竹 カンチク

「答竹」は「答竹」の誤り。

5オ25 笹 同(サ、)

「笹」は「笹」の誤り。

5オ27 篋 タケムラ

「篋」は「篋」と通用する。

5オ31 長間筍 シノ、メ

「シノ、メ」は「シノメ」(しのめ)の誤り。

5オ32 苛 タカンナ

「苛」は「芽」の誤り。

5オ36 荳(菘) タカンナ 辛芥 同

「荳」は「菘」の誤り。「タカンナ」は「タカナ」(たかな)の誤り。

5ウ27 薏苡 同(ツシタマ)

「薏苡」は「薏苡」の誤り。

5ウ54 菑 同(ハチス)

「菑」は、広韻、入声陌韻に「菑(藍之別名)」とあり、藍(青色の染料に使う草)の別名で、「ハチス」とは無関係である。これは字形の類似した「菑」を、「菑」と誤ったものである。両者の類似性については、4オ85「柢」の項参照。「菑」は本来、爾雅、猗草に「荷、芙蕖、其莖茄、其葉薏、其本密、其華菑、其実蓮、其根藕」とあり、広韻、上声感韻に「菑(菑菑、荷花未舒)」とあるように、「菑菑」なる疊韻語で、ハスの花のつぼみの様子を示すもので、「菑」もしくは「菑」一字では使用しない。日本の辞書にも、和名類聚抄「菑菑 爾雅云、其華菑菑(上胡感反、下徒感反、並上声之重)、兼名苑注云、蓮花已開曰芙蕖、未舒曰菑菑也」、前田本色葉字類抄「菑菑(ハチスノハナ 其華、芙蕖、未舒曰菑菑)」とある。類聚文字抄で「菑」すなわち「菑」を単用しているのは、日本では往々にしてある現象であるが、誤り。

5ウ57 荷 同(ハチスノハイ)

「荷」は「菑」の誤り。

5ウ65 菜 同(ヨモキ)

- 「菜」は「萊」の誤り。
 5ウ78 紫苑 シラン
 「シラン」は「シラン」(しをん)の誤り。
 5ウ87 鹿鳴草 シカナク、サ
 「シカナク、サ」は「ハキ」(はぎ)の誤り。
 6オ15 日精草 同(カラヨモキ)
 「カラヨモキ」は「カワラヨモキ」(かはらよもぎ)の誤り。
 6オ16 牡丹 フカミクサ・ホタン
 「牡丹」は「牡丹」の誤り。
 6オ26 沢寫 同(ヲモタカ)
 「沢寫」は「沢瀉」の誤り。
 6オ27 葛 同(ヲモタカ)
 「葛」は「葛」の誤り。
 6オ31 苳 同(ヲモタカ)
 「苳」は「苳」の誤り。
 6オ48 地膚 ニワクサ
 「地膚」は「地膚」の誤り。
 6オ54 苦葦 同(カラスウリ)
 「苦葦」は「苦蕒」の誤り。
 6オ64 鐵草 トクサ
 「鐵草」に「とくさ」の訓を付しているのは、本来「鐵草」とすべきところに、「鐵」を「鐵」を誤認した結果であろう。「鐵」は「鐵」の誤記とも考えられる。「鐵」は「尖」の異体字で、広雅、釈詁四に「攬、捺、剡、鐵、銳也」とあり、広雅疏証では「鐵者、爾雅、山銳而高嶠、郭璞注云、言鐵峻、集韻引広雅作鋭、今俗作尖」と説く。温故知新書に「鐵草(トクサ) 木賊(同)」、塵芥に「鐵草(トクサ) 又砥草 木賊(同)」とあるのが正しい語形であろう。
 6オ73 酢將水 カタハミ
 「酢將水」は「酢漿」の誤り。
 6オ74 瀟 同(カタハミ)
- 「カタハミ」(かたばみ)は「ヲモタカ」(おもだか)の誤り。上項を承けたもの。
 6オ75 白蒿 同(カタハミ)
 「カタハミ」(かたばみ)は「カワラヨモキ」(かはらよもぎ)の誤り。上項を承けたもの。
 6オ81 苳故 ノセリ
 「苳故」は「苳胡」の誤り。
 6オ84 羊負菜 同(ナモミ)
 「羊負菜」は「羊負來」の誤り。
 6オ85 常思 同(ナモミ)
 「常思」は「常思菜」の誤り。
 6オ87 菜耳 同(ナモミ)
 「菜耳」は「菜耳」の誤り。
 6ウ18 蕪 同(モ)
 正しくは「蕪」。字形が前田本色葉字類抄と似た崩し方をしている。
 6ウ22 蓀 同(ヲトロ)
 「蓀」は「蓀」の誤り。
 6ウ23 蘿 ツ、ラ
 「ツ、ラ」(つづら)は「ツタ」(つた)の誤り。
 6ウ25 葛穀 同(クスカツラ)
 「葛穀」は「葛穀」の誤り。
 6ウ28 落 サネカツラ
 「落」は「落」の誤り。「落」は「落」に同じ。
 6ウ34 千歲藥 アマカツラ
 「アマカツラ」(あまかづら)は「アマツラ」(あまづら)の誤り。
 6ウ36 細子葛 同(ヘクソカツラ)
 「細子葛」は「細子草」の誤り。「ヘクソカツラ」(へくそかづら)は「クソカツラ」(くそかづら)の誤り。和名類聚抄では「細子草」を「くそかづら」と読む。「へくそかづら」はあるいは後出の語形で、「くそかづら」とは、同一の植物を指すとも考えられるが、前田本色葉字類抄に「藺(ヘクソカツ

ラ)、黒川本色葉字類抄に「細子草(ヘクソカツラ)」とあるように、辞書として別語と見ることが出来る。

6ウ45 合勤 ツタ

「合勤」の表記については未詳であるが、黒川本色葉字類抄に「合勤(同(ツタ))」とある。

6ウ47 領石 同(ツタ)

「領石」は「領石」の誤り。

6ウ53 葡萄 アケウン

「アケウン」は「アケヒカツラ」(あけびかづら)の誤り。

6ウ54 及巳 ツキネ

「ツキネ」は「ツキネクサ」(つきねぐさ)の誤り。

6ウ55 半夏 ホツクミ

「半夏」は「半夏」の誤り。「ホツクミ」は「ホソクミ」(ほそくみ)の誤り。

6ウ56 黄精 ヲフエヒ

「ヲフエヒ」は「ヲフエミ」(おほゑみ)の誤り。

6ウ61 石薊 スクナヒコノクスネ・イワクスリ

「石薊」は「石薊」の誤り。

6ウ62 細辛 ヒキノヒタイ

「ヒキノヒタイ」は「ヒキノヒタイクサ」(ひきのひたひぐさ)の誤り。

6ウ63 鳶尾 アヤスクサ

「アヤスクサ」は「コヤスクサ」(こやすぐさ)の誤り。

6ウ65 狼毒 ヤナクサ

「ヤナクサ」は「ヤマクサ」(やまぐさ)の誤り。

6ウ81 菴 メハシキ

「菴」は「菴」の誤り。

6ウ83 天麻草 同(メハシキ)

「天麻草」は「天魔草」の誤り。

7オ12 酸將苗 同(ホウツキ)

「酸將苗」は「酸醬」の誤り。

7オ13 垣衣 シフノクサ

「シフノクサ」は「シノフクサ」(しのぶぐさ)の誤り。

7オ14 菘 イスタテ

「菘」は「地菘」の誤り。「イスタテ」(いぬたて)は「イヌノシリ」(いぬのしり)の誤り。

7オ16 狗尾草 同(エノコクサ)

「狗尾草」は「狗尾草」の誤り。

7オ26 草麻 カラエ

「草麻」は「草麻」の誤り。

7オ33 白蒿 カラヨモキ

「カラヨモキ」は「カワラヨモキ」(かはらよもぎ)の誤り。

7オ35 白芙 ホロシヒ

「白芙」は「白英」の誤り。「ホロシヒ」は「ホロシ」(ほろし)の誤り。

7オ36 自莫 ホロシ

「自莫」は「白莫」の誤り。

7オ42 白慈草 タワレクサ・スイクサ

「タワレクサ」は「マタフリクサ」(またぶりぐさ)の誤り。「スイクサ」は「スマイクサ」(すまひぐさ)の誤り。

7オ43 天門冬 スマイクサ

「スマイクサ」(すまひぐさ)は「スマロクサ」(すまろぐさ)の誤り。

7オ44 蒲萄 エヒテ

「蒲」は「葡」と通用する。「エヒテ」は「エヒ」(えび)の誤り。

7オ45 狼芽 コマツナキ

「芽」は「牙」と通用する。

7オ47 蒺藜 同(ムハラ)

「藜」は「藜」と通用する。

7オ51 蒟將首 マタ、ヒ

「蒟將首」は「蒟醬」の誤り。

7オ53 息筴 同(シヤケツ)

「息筴」は「阜莢」の誤り。

7オ57 拔契 同(サルトリ)

- 「拔契」は「菝莢」の誤り。
 7オ61 鳥苴 クワイ
 「鳥苴」は「鳧苴」の誤り。
 7オ65 搗脊 同(ヲニワラヒ)
 「搗脊」は「狗脊」の誤り。
 7オ66 唐杖 イタトリ
 「唐杖」は「虎杖」の誤り。
 7オ78 浅茅 アサケ
 「アサケ」は「アサチ」(あさぢ)の誤り。
 7オ81 泡沫 同(アサチ)
 「あさぢ」は、丈の低いチガヤをいう。「泡沫」の定訓は「うたかた」であり、この訓を付すことは他に例を見ない。連歌の特殊な表記であろうか。節用集諸本では「あさぢ」は「浅茅」とする表記が普通である。日本国語大辞典第二版の語誌に「平安中期になると、一面に生えることから「浅茅原ぬしなき宿」といつて荒れ果てた邸宅の象徴となり、「浅茅生の宿」「浅茅が原」の歌語が生じ、その葉に置く露を「浅茅が露」といつてはかないものたどえとし、さらに中世には「浅茅の月」と枯れ果てた浅茅と冷たく冴える月光を取り合わせて寂寥感漂う美を表わすようになる」とある。「うたかた」と「あさぢ」は、ともに世の無常を表すため、縁語として意識された結果、「泡沫」に「あさぢ」の訓が付せられたものであろうか。
 7オ87 龍葵草 フツクサ
 「龍葵草」は「龍葵草」の誤り。
 7ウ11 荷蘆 ト、キ
 「荷蘆」は「苻蘆」の誤り。
 7ウ13 燕青 ナタネ
 「青」は「菁」と通用する。
 7ウ22 苦 スカツキ
 「苦」は「苦職」の誤り。「職」の脱落。
 7ウ25 羊桃 イノコクサ
 「イノコクサ」は「イラ、クサ」(いららぐさ)の誤り。

- 7ウ26 莠 同(イノコクサ)
 「イノコクサ」は「ハクサ」(はぐさ)の誤り。
 7ウ33 白薇子 ミナシロクサ・アマナ
 「ミナシロクサ」は「ミナシコクサ」(みなしこぐさ)の誤り。
 7ウ34 紫參 チノハ
 「チノハ」は「チ、ノハクサ」(ちちのはぐさ)の誤り。
 7ウ44 屋上遊 ヤノウエノコケ
 「屋上遊」は「屋遊」の誤り。
 7ウ45 萱豆 ノウマメ
 「萱豆」は「登豆」の誤り。「ノウマメ」は「ノマメ」(のまめ)の誤り。
 7ウ55 菜草 シハ
 「菜草」は「萊草」の誤り。
 7ウ64 沢蘭 アラ、キ
 「アラ、キ」(あららぎ)は「サワアラ、キ」(さはあららぎ)の誤り。
 7ウ73 蕘(蕘花) 同(ハマヒシ)
 「蕘」は「蕘花」の誤り。「ハマヒシ」(はまびし)は「ハマニレ」(はまにれ)の誤り。
 7ウ75 曆草 シフキ
 「曆」は「歴」と通用する。「シフキ」は「ソフキ」(そふき)の誤り。
 7ウ82 蕨草 カミクサ
 「カミクサ」は「カ、ミクサ」(かがみぐさ)の誤り。
 7ウ84 江陣草 ツクモ
 「江陣草」は「江浦草」の誤り。
 7ウ85 蒲萄 フタフ
 「蒲」は「葡」と通用する。
 8オ13 苳苳 ムラサ
 「苳苳」は「苳苳」の誤り。「ムラサ」は「ムラサキ」(むらさき)の誤り。
 8ウ41 滴瀝 アマツイ
 「アマツイ」は「アマツヒ」(あまつび)の誤り。
 8ウ42 霖 ユフタチ

- 「霖」は「霖」の誤り。
 8ウ51 崇 同(アマコイ)
 「崇」は「禁」の誤り。
 8ウ57 雨鮮 ミソレ
 「雨鮮」は「霽」の誤り。
 8ウ81 滂泡 ハフク
 「滂泡」は「滂沱」の誤り。「ハフク」は「ハフタ」(ぼうだ)の誤り。
 8ウ82 雨姉 ウシ
 「雨姉」は「雨師」の誤り。
 8ウ85 霜寒
 「霜寒」は、霜が降りて寒いことなので、本来は霜の異名として挙げられるべきもの。
 8ウ86 春女
 「春女」は「青女」の誤り。霜の神の名であるので、本来は霜の異名として挙げられるべきもの。
 9オ34 菊葡
 「菊葡」は「菊圃」の誤り。
 9オ81 明庶風 タニカゼ
 史記律書に「明庶風居東方」とあり、「明庶風」は春に東から吹く風のことである。爾雅釈天に「南風謂之凱風、東風謂之谷風、北風謂之涼風、西風謂之泰風」とあることから、「谷風」も東から吹く風の異名であり、「明庶風」と同義となる。そこで「明庶風」に「たにかぜ」の訓を付した。「谷風」を訓読しただけであり、谷間を吹く風ではない。なお、漢語の「谷風」には、東風と谷間の風の両義があり、前者の場合、「谷」は「穀」に通じ、穀物をはぐくむ風の意である。
 9オ84 間闔風
 「間闔風」は「閭闔風」の誤り。
 9ウ11 広庶風
 「広庶風」は「広莫風」の誤り。「明庶風」との混同による。
 9ウ14 不闔風
- 「不闔風」は「不周風」の誤り。
 9ウ48 色雲 ムラクモ
 「色雲」は「邑雲」の誤り。
 10オ38 清閭 同(カハヤ)
 「清閭」は「諒閭」の誤り。「カハヤ」は「カリヤ」の誤り。
 10オ41 釜 カハラヤ
 「釜」は「窯」の誤り。
 10オ44 囿 ヒトヤ
 「囿」は「囿」の誤り。
 10オ52 鉤殿 ツリトノ
 「鉤」は「釣」と通用する。
 10オ57 甲第 カフテイ
 「カフテイ」は「カフタイ」(かふだい)の誤り。
 10オ63 張台 チャフテイ
 「張」は「帳」と通用する。「チャフテイ」は「チャフタイ」(ちやうだい)の誤り。
 10オ64 虚堂 タカドノ
 「虚堂」は、人気のない座敷の意味で、晋の支遁の「詠八日詩」に「虚堂陳菓餌、蔚然起奇榮」とあるものが初出であろう。「虚堂」は「たかどの」の訓とは対応しない。慶長十五年版倭玉篇、夢梅本倭玉篇で「堂」に「たかどの」の訓が付せられていることから、「堂」一字の訓が「虚堂」全体に及ぼされたものとも考えられる。中国の建造物としては、「堂」は「殿」「楼」「閣」とは異なった意味合いがあるが、日本ではそれがあいまいで、「堂」にも高層建築のイメージが付与されたのであろう。また、たとえば梁の昭明太子の「示徐州弟詩」に「高宇既清、虚堂復清」とあるような詩句の影響で、「虚堂」と「高宇」「高閣」の類が混同されたことも考えられよう。
 10オ65 民床 メンサフ
 「民床」は「眠床」の誤り。
 10オ85 廬且 同(トノイトコロ)
 「廬且」は「直廬」の誤り。転倒したうえ、字を誤ったもの。

10オ86 幄 アイノヤ

「アイノヤ」は「アケハリ」（あげはり）の誤り。

10ウ11 榎児所 コテイトコロ

「榎児所」は「健児所」の誤り。

10ウ41 刃倉 アセクラ

「刃倉」は「又倉」の誤り。

10ウ410 椽 同（ハシラ）

「椽」は「椽」の誤り。

10ウ61 犯瓦 同（メカハラ）

「犯瓦」は「牝瓦」の誤り。

10ウ63 杜瓦 同（ヲカワラ）

「杜瓦」は「牡瓦」の誤り。

10ウ65 疏 ツ、ミカワラ

「疏」は「疏瓦」の誤り。

10ウ67 葺樽 フキクレ

薄い板で屋根を葺くことを、瓦葺きに対して「樽葺き」という。「葺樽」の語は、大型辞書類にも掲載されていないが、字義と訓から考えて、やはり屋根を葺く木板（へぎ板）の意であろう。

10ウ79 破風 ハツフ

「破風」は「はふ」と読まれることが多いが、「破風」という表記を正しい見ることにも問題がある。次項「樽風」参照。現代の方言で山形県東田川郡で「はつぷ」、新潟県西頸城郡で「はつぱ」と称する。類聚文字抄の「はつぷ」も、古形を示すものであろう。

10ウ81 樽風 ハツフ

「樽」は「搏」と通用する。和名類聚抄に「樽風 弁色立成云、樽風板（上音布悪反、和名如字、楊氏漢語抄説同）」とあり、その後の多くの辞書では「樽風」の表記に従うが、狩谷掖斎の考証によれば「搏風」が正しい。その要点は、儀礼士冠礼「直于東榮」の鄭注「榮、屋翼也」に対する賈公彦の疏に「即今之搏風」とあるが、これは「搏風」が正しく、「破風」も「樽風」も俗用とするものである。風に乗って飛ぶという意味であれば、たしかに梁

の陶弘景の「許長史旧館壇碑」に「搏風泳水」とあるので、これを建造物の部位に用いたとすれば、「搏風」が穏当なのであろう。「搏」は入声で「はく」なので、「はつぷ」と読むのがやはり正しいことになる。

11オ16 椼 同（ウタチ）

「椼」は「椼」の誤り。

11オ26 臺役 カヘルマタ

「臺役」は「臺侯」または「臺股」の誤り。

11オ33 輒 カハラヤ

「輒」は「輒」の誤り。

11オ35 椽 同（エツリ）

「椽」は「椽」の誤り。

11オ54 櫃 マセカキ

「櫃」は「櫃」の誤り。

11オ78 壁帯 ナワタシ

「ナワタシ」は「マワタシ」（まわたし）の誤り。

11ウ14 間 トシカミ

「間」は「間」の誤り。「トシカミ」は「トシキミ」（としきみ）の誤り。

11ウ15

「棊」は「榎」と通用する。

11ウ28 壱 アク

「壱」は「壱」の誤り。

11ウ32 簀 スノコ

「簀」は「簀」と通用する。

11ウ35 間杵 マタルキ

「マタルキ」は「タルキ」（たるき）の誤り。

11ウ37 林子 同（シヤフシ）

「林子」は「牀（＝床）子」の誤り。

11ウ61 蝸尾 ワヒ

「蝸尾」は「蝸廬」の誤り。「ワヒ」（わび）は「ワロ」（わろ）の誤り。

11ウ62 琴屋 キンラク

- 「琴屋」は「琴室」の誤り。「キンラク」は「キンシツ」(きんしつ)の誤り。
 11ウ64 荊屋 ハウヤ
 「荊」は「茅」と通用する。「ハウヤ」(ぼうや)は「ハウラク」(ぼうをく)の誤り。
 12オ34 皇麻章 ワフシヤフ
 「皇麻章」は「皇麿」の誤り。
 12オ52 睥捨 コマホコ
 「睥」と「弄」は通用する。「捨」は「槍」の誤り。「コマホコ」は「ロウサウ」(ろうさう)の誤り。
 12オ53 塙破 ハンハリ
 「塙」は「埴」と通用する。
 12オ54 都會 トソ
 「都會」は「都志」の誤り。「トソ」は「ツシ」(つし)の誤り。
 12オ63 依天楽 エテンラク
 「依天楽」は「越天楽」の誤り。
 12ウ12 浅木 アサミツ
 「浅木」は「浅水」の誤り。
 12ウ14 我門手
 「我門手」は「我門乎」の誤り。
 12ウ82 鈴河々 ス、カ、ワ
 「鈴河々」は「鈴鹿河」の誤り。
 13オ11 角綱 アケマキ
 「角綱」は「總角」の誤り。
 13オ62 鶏鏝 ケイロウ
 「鶏鏝」は「鶏婁」の誤り。
 13オ64 沓 イチ
 「沓」は「沓鼓」の誤り。「イチ」は「イチノツ、ミ」(いちのつづみ)の誤り。
 13ウ22 願解 アタマノアワメ
 「願解」は「解願」の誤り。「アタマノアワメ」は「アタマノアワヌ」(あ

- たまのあはぬ)の誤り。
 13ウ32 眩 メクルメ
 「メクルメ」は「メクルメク」(めくるめく)の誤り。
 13ウ37 耳埴 ミ、ダレ
 「耳埴」は「耳垂」に同じで、「みみたぶ」を意味する語であり、病名ではない。「みみたぶ」の古形に「みみだれ」があるが、類聚文字抄の編者がそれを病名の「みみだれ」と誤解して、「諸病」におさめたもの。「耳埴」はみみたぶの意である。今日いわゆる「みみたぶ」は、和名類聚抄、形体部耳目類に「耳埴 弁色立成云、耳埴(和名美々太比、埴、丁果反)」とあり、「みみたぶ」が古い、黒川本色葉字類抄、美篇人体部に「耳埴(ミ、タレ 丁果反)、饅頭屋本節用集に「耳埴(ミ、ダレ)」とあるごとく、「みみだれ」の形も存在した。江戸時代には、みみたぶら・みみたぶ・みみたぶら・みみたぶ等の異形がある。一方病気の「みみだれ」は、和名類聚抄、形体部病類「聾耳 病源論云、聾耳(上音亭、和名美々太利、風熱耳生膿汁也)とあり、「みみだれ」が古い。他に、黒川本色葉字類抄、美篇人体部に「聾耳(ミ、タリ)、運歩色葉集に「聾耳(ミ、ダレ)」、天正十八年本節用集「聾耳(ミ、ダレ)」とあり、「みみだれ」の形も現れた。このように、室町時代に「みみだれ」が同音異義語として存在したために、部名を取り違えるという現象が生じたものである。
 13ウ38 聾耳 同(ミ、タレ)
 「聾耳」は「聾耳」の誤り。
 13ウ48 脰 クチヒ、
 「脰」は「脰」と通用する。
 13ウ49 蟬蛭 シタツキ
 「蟬蛭」は「禪誕」の誤り。
 13ウ71 津頭 ヨタリ
 「津頭」は「津頤」の誤り。
 13ウ75 亂 ハカミ
 「亂」は「亂」の誤り。
 13ウ82 吐覗 ツタミ

- 「吐現」は「現吐」の誤り。
 13ウ84 萃皖 サクリ
 「萃皖」は「萃咳」の誤り。
 14オ37 疝 クロカサ
 「クロカサ」は「クロクサ」(くろくさ)の誤り。
 14オ44 疔瘡 チャフサフ
 「疔」は「疔」と通用する。
 14オ45 風癰 疥 カサホロシ
 「疥」は「疥」と通用する。
 14オ46 隱癬 同(カサホロシ)
 「隱癬」は「癬疹」と通用する。
 14オ56 駝 同(アカ、リ)
 「駝」は「駝」の誤り。
 14オ62 創癰 ヒイラク
 「創癰」は「創癰」の誤り。
 14オ69 痒 カユカリ
 「痒」は「痒」の誤り。
 14ウ22 伝死病 テンシヒヤフ
 「死」は「屍」と通用する。
 14ウ23 駝腫 クツチ
 「腫」は「腫」の誤り。
 14ウ47 癰足 コイアシ
 「癰」は字書にないが、「癰」を書き誤ったものであろう。「癰足」を「こひあし」と読ませて、次項「腫脚」と同義の異表記としたもので、足の腫れる病の名。「癰」で「こひ」と読ませているのは、喉の腫れる病気に「こひ」があるためである。集韻平声麻韻に「癰瘡(喉病、或从牙)」とあることと、和名類聚抄に「喉痺 病源論云、喉痺(候婢二音、俗訛云古比)、喉裏腫塞 痺痛、水漿不得入、是也」また黒川本色葉字類抄に「喉痺(コウヒ コヒ 喉腫也)」とあって、のどの病を字音語で「こうひ」、さらに日本語化して「こひ」と呼んだことを合わせ考えれば、日本で「癰」を「こひ」と読むこ

とは説明がつく。ここでは字義を無視して、足の病の「こひあし」の表記に使用したのである。ちなみに和名類聚抄に「腫 毛詩注云、腫足曰腫(唐韻、時種反、足病也、弁色立成云、於亮阿志、此間云古比)、又云卑湿之地、其人多腫」、黒川本色葉字類抄に「腫(シヨウ 時允反 又而隴反 コヒ 是腫也)、観智院本類聚名義抄に「腫(オメアシ 此間云コヒ)」とあって、「腫」は足の腫れる病で「こひ」と呼んだことも確認できるが、こちらの語源は不明で、「喉痺」とは関係あるまい。偶然の結果、「こひ」に両義が付せられことになる。

- 14ウ51 癭 シヒリ
 「シヒリ」は「シヒネ」(しひね)の誤り。
 14ウ64 反側 トコカヘシ
 「トコカヘシ」は「トコカヘリ」(とこがへり)の誤り。
 15オ32 蜀随子 ソクスイシ
 「蜀随子」は「統随子」の誤り。
 15オ76 朴消 ホフセフ
 「ホフセフ」は「ホクセフ」(ぼくせう)の誤り。
 15オ84 苦織 同(クラ、)
 「苦織」は「苦織」の誤り。
 15ウ43 卑澄茄 ヒツテフキヤ
 「卑澄茄」は「華澄茄」の誤り。
 15ウ54 蓮蓬殼 レンホフコク
 「レンホフコク」は「レンホウカク」(れんぼうかく)の誤り。
 15ウ63 差活 シヤクハツ
 「差活」は「羌活」の誤り。「シヤクハツ」は「キヤウクハツ」(きやうくわつ)の誤り。
 15ウ64 蕪莢 フイ
 「蕪」は「夷」と通用する。
 15ウ71 蒼鼠 サフニ
 「蒼鼠」は「蒼耳」の誤り。
 15ウ83 莪茂 カホ

- 「莪茂」は「莪茂」の誤り。「カホ」(がぼ)は「カシユツ」(がじゆつ)の誤り。
- 16ウ32 皇祖孝 クハフソカウ
- 「孝」は「考」と通用する。
- 16ウ54 門葬 モンサフ
- 「門葬」は「問葬」の誤り。
- 16ウ62 基 ハカ
- 「基」は「墓」と通用する。
- 16ウ64 関日 キニチ
- 「関日」は「関日」の誤り。
- 16ウ71 遠関 エンキ
- 「遠関」は「遠関」の誤り。
- 17オ22 稠圃 シフイ
- 「シフイ」は「チフイ」(ちうゐ)の誤り。
- 17オ41 秩 同(テカシ)
- 「秩」は「栝」の誤り。
- 17オ44 芭友 同(シモト)
- 「芭友」は「菱」の誤り。
- 17ウ25 削 スサシ
- 「スサシ」は「スミサシ」(すみさし)の誤り。
- 17ウ28 鋳 ノコキリ
- 「鋳」は「鋳」の誤り。
- 17ウ32 鉛 同(テフノ)
- 「鉛」は「鉛」の誤り。
- 17ウ48 鑪 ヤスリ
- 「鑪」は「鑪」と通用する。
- 17ウ410 解門 クシリ
- 「鑪」を「解門」と分字することは、日本では通例であり、有坂本和名集、キリシタン版落葉集で「解門」を「くじり」と読んでいる。
- 17ウ52 柀格 サイツチ
- 「柀格」は「柀格」の誤り。
- 17ウ55 鉦 ロクロカネ
- 「鉦」は「鉦」の誤り。
- 17ウ57 罽 サクツエ
- 「サクツエ」は「サイツエ」(さびづゑ)の誤り。
- 17ウ71 鉦 カスカイ
- 「鉦」は「鉦」の誤り。
- 17ウ72 鋸 同(カスカイ)
- 「鋸」は「鋸」の誤り。
- 17ウ83 極 同(スミカキ)
- 「極」は「炭極」の誤り。
- 17ウ89 干 同(ニカハ)
- 「干」は「干漆」の誤り。
- 18オ14 録筆 同(ハケ)
- 「録」は、「鬚」の異体字。前田本色葉字類抄の字形と一致する。
- 18オ34 鑽 マト
- 「鑽」は「鑽」の誤り。
- 18オ53 鉈 同(チフシヤク)
- 「鉈」は「鉈鉈」の誤り。
- 19ウ51 雀穎
- 「雀穎」は「雀頭」の誤り。
- 19ウ84 鳥石
- 「鳥石」は「鳥石」の誤り。
- 20オ23 石瓦
- 「石瓦」は「古瓦」の誤り。
- 20オ24 黒淵
- 「黒淵」は「墨淵」の誤り。
- 20オ41 亨紙 コフシ
- 「亨紙」は「厚紙」の誤り。
- 20ウ13 葵倫

- 「葵倫」は「蔡倫」の誤り。
 20ウ14 紅銭 コウセン
 「紅銭」は「紅牋」の誤り。
 20ウ22 兼網 ケンマフ
 「兼網」は「魚網」の誤り。「ケンマフ」は「キヨマフ」(ぎよまう)の誤り。
 21オ22 蹴鞠 マリ
 「蹴鞠」は「蹴鞠」の扁揃え。
 21オ55 交物 ハサミモノ
 「交」は「夾」と通用する。
 21オ81 紅術 ケンシユツ
 「紅術」は「幻術」の誤り。
 21ウ53 御像 コエイ
 「御像」は「御像侍者」の誤り。「コエイ」は「コエイシシヤ」(ごえいじしや)の誤り。
 22オ52 漏斎 ロサイ
 「漏斎」は「邏斎」の誤り。
 22オ53 掛塔 クハタ
 「塔」は「搭」と通用する。
 22ウ27 析櫃 ヲリ
 「析」は「折」の誤り。
 22ウ38 砧 同(カラウス)
 「砧」は「砧」の誤り。
 22ウ57 懸槃 カケハン
 「槃」は「盤」と通用する。
 22ウ61 牙槃 ケハン
 「槃」は「盤」と通用する。
 22ウ74 酒樽 ホカイ
 「酒樽」は「酒禱」の誤り。
 22ウ88 鈿 同(カナヘ)
 「鈿」は「鐔」と通用する。

- 23オ11 攀 テナベ
 「攀」は本来病名の「てなへ」であるが、これを「手鍋」と誤解して、雑具器に掲載したもの。「攀」の字義は、素問、疏五過論に「痿躄為攀」とあるように、足が不自由なことであるが、慧琳一切経音義に「攀、手足筋急拘束、不能行歩申縮、集韻に「攀(手足曲病)」とあるように、広く手足についても使う。とはいえ、中国では足について使用することが多い。日本では、新撰字鏡に「攀(又作癢二形、力円反、平、係也、茶也、倭黎反、手奈戸)」、観智院本類聚名義抄に「攀(音聯 テナヘ ツ、ル 犬ノキヅナ ヒカフ アシヲ 鷹恭也 係也)」とあるように、「てなへ」の訓が一般的である。
 23オ22 檜 同(コシキ)
 「檜」は「楸」の誤り。
 23オ32 唾壺桶 タロヲケ
 「タロヲケ」は「タコヲケ」(たごをけ)の誤り。
 23オ33 田子桶 タロヲケ
 「タロヲケ」は「タコヲケ」(たごをけ)の誤り。
 23オ36 析
 「析」は「折」の誤り。
 23オ37 浅甕 サフケ
 「サフケ」は「サラケ」(さらげ)の誤り。
 23オ41 籬 アシロ
 「アシロ」は「アシカ」(あじか)の誤り。
 23オ47 弈(≡奕) カサメ
 「カサメ」は「カサネ」(かさね)の誤り。
 23オ410 瀘 ミツフルイ
 「瀘」は「濾」と通用する。
 23オ53 躡 同(ツルヘ)
 「躡」は「罐」と通用する。
 23オ54 躡 同(ツルヘ)
 「躡」は「罐」と通用する。
 23オ58 杓子 同(シヤクシ)

- 「杓子」は「杓子」の誤り。
 23オ62 浴解 ユフネ
 「解」は「斛」と通用する。
 23オ65 撥筥 同(カイケ)
 「撥筥」は「搔筥」の誤り。
 23ウ12 澡盥
 「澡盥」は「澡盤」の誤り。
 23ウ42 履 同(アシタ)
 「履」は「履」の誤り。
 23ウ47 襖 タヒ
 「襖」は「襪」の誤り。
 23ウ48 草皮腹 同(タヒ)
 「草皮腹」は「單皮履」の誤り。
 23ウ61 履楯 クツカタ
 「履楯」は「履楯」の誤り。
 23ウ62 履屁 クツシキ
 「履屁」は「履履」の誤り。
 23ウ67 跣 ハタシ
 「跣」は「跣」の誤り。
 24オ41 鼠弩 ラミ
 「ラミ」は「ラシ」(おし)の誤り。
 24オ55 灑 サラ
 「灑」は「灑」の誤り。「サラ」は「サテ」(さで)の誤り。
 24オ63 鉗袋 エフクロ
 「鉗袋」は「鉗袋」の誤り。
 24オ74 太角 ハラノフエ
 「太」は「大」と通用する。
 24ウ21 相桃 アイソム
 「相桃」は「相挑」の扁揃え。
 24ウ22 婚合 マキアウ
- 「マキアウ」は「マクワウ」(まぐはふ)の誤り。
 24ウ36 蜜突 ミソカクナキ
 「蜜」と「密」と通用する。
 24ウ51 嫺 ヤモメ
 「嫺」は字書に見えず、「獨」から作った国字であろう。
 24ウ54 政家 カイケ
 「政家」は「改嫁」の誤り。「カイケ」は「カイカ」(かいか)の誤り。
 25オ62 箒 カ、リ
 「箒」は「箒」の誤り。
 25オ63 銖 カ、リ
 この前後は「箒(箒)〈カ、リ〉銖(同)箒(箒)火(同)簞(同)となつており、燈焼之部に属することから、「銖」も含めて、「かがりび」を意味するものとされていることがわかる。これは、分銅の意味の「かがり」と「かがりび」の「かがり」を混同したものである。「銖」は、観智院本類聚名義抄に「銖(音珠 純也 カ、リ 十二粟重一分、十二分重一)」、明応五年本節用集、賀篇財宝部「銖(カ、リ)」とあることから、一定の重さを持つた分銅の意で、懸けるところから「かがり」と読まれた。
 25オ64 箒火 同(カ、リ)
 「箒火」は「箒火」の誤り。
 25オ68 煇 同(モエクイ)
 「煇」は「煇」の誤り。
 25オ75 爛 同(ホノヲ)
 「爛」は「爛」の誤り。
 25オ710 細梗 同(ホソクツ)
 「細梗」は「細梗」の誤り。
 25オ810 窓 クト
 「窓」は「窓」の誤り。「窓」は「窗」に同じ。
 25ウ15 焔 ス、
 「焔」は「焔」の誤り。
 25ウ43 玉虫

- 「虫」は「燭」の略体。
 25ウ46 録燭
 「録」は「緑」の誤り。
 25ウ51 銀虫
 「虫」は「燭」の略体。
 25ウ73 鵠毛
 「鵠毛」は「鵠尾」の誤り。
 26オ45 春莫
 「莫」は「暮」と通用する。
 26オ54 建眼
 「建眼」は「健眼」の誤り。
 26オ81 青偏
 「青偏」は「青編」の誤り。
 26ウ23 軒轅底
 「軒轅底」は「軒轅氏」の誤り。
 26ウ46 玉明
 「玉明」は「五明」の誤り。
 26ウ71 珊瑚
 「珊」と「珊瑚」は通用する。
 27オ15 木上人
 「木上人」は「木上座」の誤り。
 27オ16 狭丈
 「狭丈」は「扶老杖」の誤り。
 27オ43 駿骨
 本来は馬の異名ではなく、賢人の意。戦国策、燕策で郭隗が述べる、千里馬の骨を大金で買ったという寓話による。任昉の「天監三年策秀才文」に「朕傾心駿骨、非慎真龍」とある。
 27オ61 轂束
 「束」は「棘」と通用する。本来は牛の異名ではなく死に臨んで牛がビクビクするようす。孟子、梁惠王上に見える。
 27オ81 明祝
 「明祝」は「明視」の誤り。
 27オ82 欽辱
 「欽辱」は「缺辱」の誤り。
 27ウ11 家貴
 「家貴」を「家貴」に誤る。文明本節用集も同様に誤る。
 27ウ21 五惡
 「五惡」は「五德」の誤り。
 27ウ22 光鳴
 「光鳴」は「先鳴」の誤り。
 27ウ23 光睦
 「光睦」は「告曉」の誤り。
 27ウ31 黃鳥
 本来は鶴の異名でなく、ウグイスの異名。
 27ウ33 昭仙
 「昭仙」は「胎仙」の誤り。
 27ウ41 金花子
 「金花子」は「金衣公子」の誤り。
 27ウ42 柳拔子
 「柳拔子」は「柳梭子」の誤り。
 27ウ51 鴉雁
 「鴉雁」は「鴻雁」の誤り。
 27ウ73 蟬蛄
 「蟬蛄」は「蟬蛄」の誤り。
 27ウ81 池鮮
 「池鮮」は「池鱗」の誤り。
 27ウ82 鯉鱗
 「鯉鱗」は「錦鱗」の扁揃え。
 27ウ84 水拔花
 「水拔花」は「水梭花」の誤り。

28オ11 且渴

「且渴」は「止渴」の誤り。

28オ14 玉車

「玉車」は「玉骨」の誤り。

28オ15 肌

「肌」は「玉肌」の誤り。

28オ21 請友

「請友」は「清友」の誤り。

28オ32 額魚

「額魚」は「額黄」の誤り。

28オ42 霜傑

「霜傑」は「霜傑」の誤り。

28オ53 鹿尾 ロクヒ

「鹿尾」は「塵尾」の誤り。「ロクヒ」(ろくび)は「シユヒ」(しゅび)の誤り。

28オ62 28オ7

このあたり、橘の異名と枇杷の異名に混乱が見られる。「盧橘」は金柑とする説もあるが、枇杷の異名ともされる。「木奴」は柑の異名。ただし、他は中国の文献に見えない。「霜飽」はあるいは「霜包」の誤りで、柑を意味する語として宋詩に見える。文明本節用集に載せる、橘の異名に「木奴」、「金鈴」、「霜飽」、「半黄」、「見霜」、「欠霜」が見え、枇杷の異名に「盧橘」、「林鈴」が見える。これによれば、橘と枇杷の異名がほぼ入れ替わっていることになる。

28オ72 欠霜

「欠霜」は「見霜」の誤り。文明本節用集に橘の異名として「見霜」と「欠霜」の双方を載せるが、橘が冬に実を結ぶことからつけた異名であれば、「見霜」が正しく、「見」を「欠」に誤ったものであろう。「欠霜」では意味をなさない。いずれにせよ日本での異名。

28オ74 羊黄

「羊黄」は「半黄」の誤り。

28オ82 扶景 フケイ

日本独自の異名と思われるが未詳。傅玄の「安石榴賦」に「其在晨也、灼若九日栖扶桑」とあり、石榴の粒の輝きを、扶桑にかかる太陽の光になぞらえている。「扶景」は扶桑の光の意味にとれるので、あるいはそのような発想の語か。文明本節用集の石榴の異名に「映景」があり、「扶景」といづれか書き誤りとも考えられる。

28オ83 火谷

文明本節用集の石榴の異名に「大谷」がある。「火谷」は「大谷」の誤り。一般には潘岳の「閑居賦」に「張公大谷之梨」とあるように、梨の産地とされる。

28オ84 靈雪

「靈雪」は「零雪」の誤り。

28ウ11 青陽

「青陽」は「青楊」の誤り。

28ウ15 三眼

「三眼」は「三眠」の誤り。

28ウ22 君平

「君平」は「邵平」の誤り。

28ウ32 黄梁夢

「黄梁夢」は「黄梁夢」の誤り。

28ウ53 井輪 イリン

「イリン」(ありん)は「セイリン」(せいりん)の誤り。

28ウ55 我眼

「我眼」は「鵝眼」の誤り。

29オ24 単闕 タンカ

「タンカ」は「タンアツ」(たんあつ)の誤り。

29オ46 闕茂

「闕茂」は「闕茂」の誤り。

29オ82 萬中

「萬中」は「禺中」の誤り。

- 29オ84 日南
 「日南」は「日中」の誤り。
 29オ86 日映
 「日映」は「日映」の誤り。
 30オ22 仁科 ニシキ
 「ニシキ」は「ニシナ」(にしな)の誤り。
 30オ31 錦古利 マシコヨリ
 「マシコヨリ」は「ニシコヨリ」(にしこおり)の誤り。
 30オ35 三宅 ミアケ
 「ミアケ」は「ミヤケ」(みやけ)の誤り。
 30オ51 鷗田 シキタ
 「シキタ」は「トヒタ」(とびた)の誤り。
 30オ66 度 ワタライ
 「度」は「度会」の誤り。
 30オ75 天生 ミウ
 「天生」は「壬生」の誤り。「ミウ」は「ミフ」(みぶ)の誤り。
 30オ82 填岡 ハニヲカ
 「填」は「埴」と通用する。
 30ウ22 饗食 アイハ
 「饗食」は「饗庭」の誤り。
 30ウ24 印南野 イナノ
 「イナノ」は「イナミノ」(いなみの)の誤り。
 30ウ56 墨役 スノマタ
 「役」は「俣」と通用する。
 30ウ71 伊達 イテ
 「イテ」は「イタテ」(いだて)の誤り。
 30ウ73 榛谷 ハシカヘ
 「ハシカヘ」は「ハンカヘ」(はんがえ)の誤り。
 30ウ75 白杵 ウスイ
 「ウスイ」は「ウスキ」(うすき)の誤り。

- 31オ31 委 シトム
 「委」は「委文」の誤り。「シトム」は「シトリ」(しどり)の誤り。
 31オ43 権 クホ
 「権」は「窪」の誤り。
 31オ54 河役 カフハタ
 「役」は「俣」と通用する。「カフハタ」は「カフマタ」(かはまた)の誤り。
 31オ55 江役 エハタ
 「役」は「俣」と通用する。「エハタ」は「エマタ」(えまた)の誤り。
 31オ73 班目 フチメ
 「班」は「斑」と通用する。
 31ウ33 館 タ、ラ
 「館」は「館」の誤り。「タ、ラ」は「タチ」(たち)の誤り。

三 まとめ

前章は、『類集文字抄』に見られる表記上の特徴を、列挙した。ここに見られる漢字表記もしくは仮名表記の変異につき、その生じた原因を分類すると、以下のようになる。もとより、これで全てが尽くされている訳でもないし、原因が複合しているケースもあるので、これは概略的な試みに過ぎない。

第一に、漢字表記の問題点は、以下のように分けられる。全体として言えば、難解な漢字の理解が少ないため、一見簡明な表記に誤るといふ方向性が見られる。複雑な漢字を分字するのもその一端である。逆に合字、すなわち漢字を組み合わせて別字を作り出したような例は目立たない。上述の凡例に述べたように、漢字の通用と誤記の差は、ある程度相対的なものであるが、ここでも別に挙げた。

a 分字によるもの

6オ73 酢將水(漿を將水に分ける)

7オ12 酸將苗(醬を將西に分け、西を苗に誤る)

b 字形類似による通用

- 2ウ42 鑷 (鑷を鑷に通用させる)
 2ウ61 五穀 (穀を穀に通用させる)
 c 字形の誤り

- 2オ44 踏踞 (踏を踞に誤る)
 2ウ23 埴 (埴を埴に誤る)
 d 同訓の別語との混同

- 2オ39 日精 (火と日が同訓だったため)
 2オ83 嗟 (奮・菑と別語だが、同訓だったため、同義と思われた)
 e 扁揃を用いたもの
 2オ86 速田 (腴迫を速迫と表記した結果)
 15ウ64 蕪蕪 (蕪夷を蕪蕪と表記)

f 転倒例

- 10オ85 廬且 (直廬を転倒し、直を且に誤る)
 13ウ82 吐岷 (岷吐を転倒したもの)

g 脱落例

- 4オ76 山茱 (山茱萸の萸を落とす)
 4ウ410 寄 (寄生の生を落とす)

次に、傍訓に使用されている仮名表記の諸問題は、以下のように分類できる。

a 仮名の字形類似による誤読

- 2ウ48 杓 (コスキをフスキに誤る)
 3オ38 覓 (ヒユをヒエに誤る)

b 類似の別語 (多くはわかりやすい語) との混同

- 2ウ74 糲 (ヒラシラケノヨネをシラケヨネに誤る)
 2ウ78 糙米 (モミヨネをモチノコメに誤る)

c 漢字表記に影響された誤読

- 5ウ87 鹿鳴草 (ハギをシカナククサに誤る)
 d 仮名の転倒

- 2ウ43 柅 (ワクノエをクワノエに誤る)

e 反義語の訓の入れ替え

- 2ウ88 種と3オ12 種 (ワセとラクテの訓を入れ替える)

これら漢字表記、仮名表記に見られる過誤は、文明十八年に乙夜又丸が書写した時点で生じたものか、それ以前の資料ですでに生じていたものか判断するのは難しい。とはいえ、若年の乙夜又丸が、自らの使用のために、手控えとして書き写したものであるとすれば、前者が多くを占めることは想像に難くない。いずれにせよ、古辞書資料に於ける表記が、伝写の過程で崩れていくことは、通常の現象であり、今回調査した『類集文字抄』の状況は、広く古辞書のテキストを研究する際の参考に資するものである。

中には、4オ85の「栴(エノキ)」の如く、『和名類聚抄』の「栴」が、『類聚名義抄』の「栴」を経て、『色葉字類抄』の「栴」へと崩れて行った過程を承けるものもある。中国の漢字を比較的正確に受け継いだ『和名類聚抄』の表記が、『類聚名義抄』、さらには『色葉字類抄』へと変化する過程で、日本的な異体字(異表記)が発生して行ったということは、室町の前古辞書を考える上で前提としなければならないだろう。

〔参考文献〕

- 榊原邦彦「類集文字抄本文及び総索引」(国語学懇話会編『国語学論集』第二輯、一九八〇)
 ○榊原邦彦「類集文字抄」(豊田工業高等専門学校研究紀要)一五、一九八二
 ○小池一恵「天理図書館蔵和名集と類集文字抄との関係について」(古辞書研究会編『日本語と辞書』第十五輯、二〇一〇)